

太宰治の「女生徒」考

金 奈 炅*

(e-mail : nakyungssem@hotmail.com)

目 次

序論

本論

1. 有明淑の日記
 - 1) 照合から分かる人柄
 2. オリジナルティーの意味は何だろうか。
 3. 「私」の心理の移ろい

結論

序論

太宰治の「女生徒」は昭和十四年四月一日「文学界」第六巻第四号の創作欄に発表された作品である。当時の書簡に「女生徒」に対して言及した箇所がある。

…私こそごぶさた申して居ります。このごろ仕事が少しづゝすゝんで居ります。四月号は、「文芸」と「文学界」にそれぞれ創作を発表いたしました。これは、いづれも下手くそなので、恥づかしいものです。四月中には、書き下し短編集を竹村書房から出版いたします。全部未発表の短編を集め、二百五十枚いちどに出版発表するのです。いゝ本にしたいと思つてゐます。1)

これは昭和十四年三月十一日の中村貞次郎宛ての書簡である。ここで「文芸」四月号に出した創作のことは「懶惰の歌留多」であり、同月号「文学界」に出したものは

* 仁済大学校講師 近代文学

1) 『太宰治全集』(1962) (第11巻、筑摩書房、p.154~155) により、以下、引用文は『太宰治全集』(第2巻) に拠る

「女生徒」である。発表当時この作品に対する批評は様々であるが、特に川端康成²⁾が激賞していることはよく知られていることであろう。《「女生徒」のやうな作品に出会へることは、時評家の偶然の幸運なのである。…(中略)…自分も小説が書きたくなるといふことのうちに、私の美学はすべて含まれている》と前置きして、次のように語っている。

太宰氏の青春は「女生徒」に、女性的なるものとして歌はれた。…(中略)…「女生徒」は無論外村氏の言ふやうに、「一人の『女生徒』に托した氏自身の思ひ出である。」さして、女生徒を借りて、作者自身の女性的なるものすぐれてゐることを現した、典型的な作品である。この女生徒は可憐で、甚だ魅力がある。少しは高貴でもあるだらう。女の精神的なものについて、大凡失望することの多い私は、この「女生徒」程の心の娘も現実にはなかなか見つからないのを知るのである。これは太宰氏の青春の虚構であり、女性への憧憬である。

川端康成からの批評の一部分であるが、《女生徒を借りて、作者自身の女性的なるもの》を表して《太宰氏の青春の虚構であり、女性への憧憬》であると指摘し、「女生徒」を太宰の純粹な創作による作品として読んでいた。中村地平³⁾も川端康成が指摘したことと類似した意見を出している。

巻中の「女生徒」は世評の高かつた作品であるが、これが成功した原因は、単に傍観的に少女を描いたのではなくて、少女に仮托して、自己の心懐を述べた—そのために生じた肉づけの豊かさに在るだらう。

中村も《少女に仮托して、自己の心懐を述べた》と指摘しているように、これらの批評をまとめてみると、作品を太宰が一人の女性に託して書いた《虚構の産物》として捉えていることが分かる。本当にそうであるかという疑問から始めたい。それから、女学生が王子様を待っていた行動の意味「待つ」という短編と一緒に考察してみたい。

本論

1. 有明淑の日記

小説が発見された時点では、多くの人は「女生徒」が太宰の創作によって作り上げられた作品中の一つであると思っただろう。それは執筆事情が明らかにされていなかったから当然なことである。しかし、夫人津島美知子⁴⁾はその経緯について次のように回想している。作

2) 川端康成(1992)「小説と批評」『太宰治論集』(第1巻、ゆまに書房、p.191~198)

3) 中村地平(1992)「太宰治と「女生徒」」『太宰治論集』(第1巻、ゆまに書房、p.209~211)

4) 津島美知子(1978)「『女生徒』のこと」は『回想の太宰治』(人文書院、p.189)に収められてから五年

品発表後、よほど歳月が経ってからのことであった。

『女生徒』が、若い女性の一愛読者から送られたノートに拠っていることは、前にも全集月報などに書いたが、これはS子さんの昭和十三年、十九歳の、四月三十日から八月八日までの日記で、伊東屋の大判ノートブックに、ぎっしり書いてある。肉筆の書き流しで、大変読み辛い。これを一読さつと、「可憐で、魅力的で、高貴でもある」（川端康成氏の『女生徒』評から）魂を、つかみとった太宰は、傍にあった岩波文庫の『女生徒』から題名をとって八十枚の小説に仕立てて、『文学界』昭和十四年四号に発表した。太宰が印をつけたり書き入れたりしているそのノートが残っているが、『女生徒』の書き出しと終りの部分は全くノートにはない。

当時、この作品は《虚構の産物》であると知られていた。ところが、津島美知子の回想により、《『女生徒』が、若い女性の一愛読者から送られたノートに拠って》いたという事実が明かされたことは、作品の読み方には大事な情報になるだろう。これが明らかになった以上は、読み方は変わっているはずである。「女生徒」の最初の書き出しと終わりの部分はS子の日記にはないという指摘から、太宰治の純粋な創作ではないと推測も成り立つだろう。

もちろん、作品のモトになったS子の日記は津島美知子さんによってずっと非公開にされていたので、「女生徒」の読み方は様々であったはずである。ところが、《全貌を知りたい》という読者からの強い願望により、やっと平成八年青森県近代文学館に寄贈されたので、日記との比較考証も必要になってくるわけであろう。

照合に入る前に「S子さん」と呼ばれている人について簡単に見よう。「S子さん」は有明淑という人で大正八年三月十日に微生物学者有明文吉とトク父母の次女で生まれた。成女高等女学校を卒業する直前に父が死亡。昭和十一年三月に女学校を卒業してから、イトウ洋裁学校に通いはじめる。このあたりから太宰文学に親しみ、文章を書き始めることになった。ところで、日記との照合はどうであろうか。

1) 照合から分かる人柄

太宰宛に送られた大学ノートには昭和十三年四月三十日から八月八日までの日記であり、作品と比較したところ、四月三十日から五月二七日までの日記はそっくりとは言えないが、大体の内容が「女生徒」にほぼ混じって引用されていた。また、六月二日・四日・十日・七月十三日・十八日・八月五日の日記からは何箇所かが引用されていることも分かった。以上のように、有明は約三ヶ月間の日記を一方的に太宰治に郵送した訳である。何故、走り書きで書かかれた下手くそな日記が送られたのかが引っ掛かるが、彼女の四月三十日の日記にその理由が書かれていた。

後、修正・加筆されて『講談社文庫』（1983）に入っている。

此の雑記帳、昨日買ってきたのだけれど、それから、始終、何んだか嬉しくてたまらない。…(中略)…このノート見ていると、笑ひたくなる。日記の他に、書く事は、女学校時代綴方の他には無い。…(中略)…これをうんと書いて、安つばい雑誌でもいゝ、出る様になればいゝなあー。今も書きながら思つてしまつた。5)

ここに書かれているように、自分の日記がなんと雑誌に載せてもらいたいという希望で、太宰に送ったのであった。それを太宰は「女生徒」と名づけ6)、一人の女性が朝起きてから、夜寝るまでの一日の出来事で書き上げている。なら、日記公開がなかった時の同時代批評である《虚構の産物》はもう成り立たないだろう。《虚構の産物》ではなく、太宰は日記から「女生徒」の内容を埋めてきたからである。では、各主人公の人物はどうか。

自分から、本を読むといふことを取つてしまつたら、この経験の無い私は、泣きべそをかくことだらう。それほど私は、本に書かれてある事に頼つてゐる。一つの本を読んでは、パツとその本に夢中になり、信頼し、同化し、共鳴し、それに生活をくつつけてみるのだ。また、他の本を読むと、たちまち、クルツとかはつて、すましてゐる。人のものを盗んで来て自分のものにちやんと作り直す才能は、そのずるさは、これは私の唯一の特技だ。本当に、このずるさ、いんちきには厭になる。(『全集』p.148~149)

先程も述べたように、「女生徒」が有明の日記から素材を得、書き始めたことは明確な事実であったが、それを前提とすれば、まるで太宰が有明の日記を書き写していることに対する恥ずかしさやずるさを「女生徒」の女主人公の口を借りて言わせているような錯覚ができる表現ではないだろうか。しかし、有明の五月十日日記に次のように書かれている。

自分から「本を読む」と云ふ事を取つてしまつたら、此の経験の無い私は、泣きべそをかく事だらう。それ程、私は、本の書いてある事に頼つてゐるのです。此の本を読んでは、バーと此の本に夢中になり信頼し、それに生活を、くつつけてみるのです。又あの本を見れば、それと同じ事をやるのです。…(中略)…人のものを盗んできて自分のものにちやんと作り直す、ずるさ位ひでせう。本当に、此のずるさには、厭になる。毎日、失敗ばかり恥をかいればかりいたら、よくなるかもしれない。

以上のように、二箇所を照合してみたところ、太宰は有明の日記をそのまま引用していた。なぜ、太宰はまるで太宰自身がそれを言っているかのように、錯覚ができる部分を有明から引用したのだろうか。その理由を考えてみよう。ある十九歳の女学生は「生きてみた[る]兵隊」7)を読んで批判し、戦争が捉えられている作品が書きたいなど、戦争に一言

5) 本論に出てくる有明の抜粋はすべて『資料集第一輯有明の日記』(2000)(青森県近代文学館)に拠る。

6) 《「女生徒」の題名は、当時、机辺にあつた、フラビエの岩波文庫本の「女生徒」からとつた。》(津島美知子、(1963)「御崎町から三鷹へ」『太宰治研究』(審美社)

7) 石川達三が(昭和13年3月『中央公論』)に発表した作品で、中央公論社の派遣員として昭和12年の暮れから

ぐらい口を挟める堂々なる女性である反面、《青い上着を着て、雲居さんと銀座に、買物》に行ったり、《お父さんと一緒に》《散歩》に出かけたり、《大掃除》もした。また、勉強にも励んでいて、ありふれた生活をしていた。つまり、「女生徒」の彼女に比べ、有明の方がしっかりと社会意識を持っていたことがある程度は分かる。こういう有明に太宰の気持ちが重なり、有明ごとくいくら戦争を捉えた作品を書いても、戦争と直接に向き合わず、真似したり、想像だけで、作品を書き上げることは、単純に書き写す行為に過ぎないという気持ちが込められ、〈ずるい〉と断言し、引用したのではないだろうか。

さらに、「女生徒」を佐々三雄⁸⁾は《実に綺麗な美しい、楽しい文章》の《天衣無縫》に書かれている作品であると、また、川端康成は《この女生徒は可憐で、甚だ魅力がある。少しは高貴》でもあるという指摘は日記公開前の論説であるので、古い指摘であることが明らかになってくる。

結局、有明の日記には純粹であり、無垢な少女の姿はほとんどなく、しっかりしている彼女が書かれていた。特に、五月十一日と七月一日の日記に詳しく書かれている。

お八つを食べてから「生きてゐた〔る〕兵隊」を読む。この小説は、問題になつたさうだけれど、之を問題に取り上げた人達が、馬鹿みたいに思はれる。…（中略）…どんな人だつて、自分の生れた所を愛す気持はあるのに、つまらない事に反抗心を燃やさせたり、こんな小さな私達でさえ悲しい様に思える程、わからない事をする独裁政治が厭になる。戦争は、厭なものだ。苦しいものだ。…（中略）…自分達が、今何んの為めに、生命をなげ出してまで戦つてゐるのか、わからないのに、素直に自分から進んで苦しみをなめ、死ぬ時は「天皇陛下万ザイ」と、さげぶ人達の事を思ふと、たまらない気持がする。

次は七月一日の日記である。

お八つを食べてゐたら「号外」が来る。ソ聯ゲ・ペ・ウの極東長官とか云ふのが、スターリン制〔政〕治よりのがれて、満州に救を求めて来たとか云ふのだ。こんな事が号外となつて人々を驚かすのだろうかと思議な気がする。国木田独歩のたしか「牛肉と馬れいしよ」だつたが、主人公が友達に話してゐる言葉を思ひだした。歴史とか国家とか組織とか呼ばれて始終戦つてゐる人達は、国を愛する、正義の勝利、真理の公平とかその人の感情、思想、理想、真実に向かつて自分は戦つてゐるつもりだろうけれど、果して何年も平和で、これから先き何も起らず、唯食べて生きればよいと云ふ幸福な時が来た時、心の底から満足し得るだろうか。

有明の日記には、日常生活の出来事や気持ち以外に、珍しく社会的なことと政治的なことに触れていた。戦争を真似て作品を書きたがっていた彼女は社会に向けて《わからない

13年1月末まで日本軍の南京略に從軍した時の体験を書いた物である。しかし、「悪質な反軍思想」という理由で発禁となった。

8) 佐々三雄(1992)「文芸時評」『太宰治論集』(第1巻、ゆまに書房、p.199~200)

事をする独裁政治が厭》になり、《真相はいろゝゝある》けど、《私達の心に起きるものは、「何故、何故」》と心底から聞き返していた。これはまるで「女生徒」で女主人公が自分の気持ちと人の気持ちが全く違った時《何故》だろうかとお母さんに聞いたら、お母さんから《中心はづれの子だ》なあと答えられた場面と類似しているだろう。では、当時の社会状況はどうであったのだろうか。

昭和十二年七月に日本は北京郊外で勃発した蘆溝橋事件（日中戦争の発端）以来、公然と軍人が政治に介入して来て言論・思想の統制を強化し、文筆家や学者の身辺も危険になり始めていた時期であった。奥野健男⁹⁾は当時の文学者の状況について、次のように書いている。

日本の文学史上、昭和十年代ほど、文学者が自己と、自己の置かれている現実と真剣に考え抜き、追及した時代はないでしょう。…（中略）…自己や文学や社会に対する自信と安定は全くありません。そのようなものが喪失した地点から、日本の文学は始まっているのです。一九二九年の世界的大恐慌を境いにしてヨーロッパの近代精神の光栄ある命脈は断たれ、人間の精神が全く現実の条件に従属させられた、…（中略）…この時ぐらい政治的、時代的現実に対する人間の個人の、そして自己の無力さ、弱さ、だらしなさを味わされた時はなかつたでしょう。…（中略）…昭和十年代の文学は、この人間の無力さ、弱さ、だらしさ、そして裏切りの罪意識から出発したのです。…（中略）…中日戦争から太平洋戦争に突入すると、危機意識はかえつて弱くなり、殆どの作家は一切の批判を失い無条件に戦争を謳歌し、時代に流され、甘くだらしなくなります。

丁度その時期は石川達三の「生きている兵隊」という作品が《悪質な反軍思想》という理由で発禁されていた。有明はまるでそれを視野に入れ、《精神が全く現実の条件に従属させられた時代》の中で《死ぬときは「天皇陛下万ザイ」と、さけぶ人達の事を思ふと、たまらない気持ちがする》と嘆き批判しているような気もする。彼女は日記を書くことを通してだんだん教育や文化全般などに軍国主義化に進んでいた時期であること、また、軍国主義化の下で画一化され、《中心はづれの子だ》にならないようにしていた時期に触れたがっていたのではなからうか。しかし、太宰治は「女生徒」ではこれを取り上げてはいなかった。たぶん当局の検閲を恐れ¹⁰⁾、わざと取り入れなかったのだろう。有明の日記からは心の起伏が激しい感受性豊かな一人の女性像が読み取れる反面、社会に対する批判精神もしっかり持っている女性として描かれていた。反対に、「女生徒」では社会意識などは全然無く、感受性豊かな女性が描写されていることが分かった。これに対し、根岸泰子¹¹⁾

9) 奥野健男(1957)『太宰治論』（近代生活社、p.219～225）

10) 田中英光(1948)が書いた太宰治全集月報（12月号、八雲書店）によると、《昭和十四年、軍隊の三等症になり、黄河の前線から後退入院を命じられていた出来事を書いた。その生活の中、検閲に触れているところがある。班長たちから長文の手紙は三重の検閲があり、まず病院附曹長、臨普憲兵隊員、更に、内地に渡つてから、もう一度、憲兵の検閲があるから、よほど、その内容は慎重でなければならぬ》という内容であった。

11) 根岸泰子(1999)「『女生徒』—可憐で、魅力があり、少しは高貴でもある少女」『国文学』（学灯社）

は《批判精神は、はたして有明淑子のもとのノートに起源をたどれるものなのか、それとも太宰自身のそれに依拠したものなのかの問題である》と指摘しているが、有明の方が先ではないだろうか。つまり、太宰はわざと有明の社会意識には触れず、「女生徒」を通して感情豊かな少女の意識構成を組み立てようとしていた。太宰のオリジナルティーを探りながら、その意識構成について考えてみよう。

2.オリジナルティーの意味は何だろうか。

「女生徒」が有明の日記を下敷きにして書かれたことは疑う余地はないが、日記にはない太宰治の書き加えだと考えられる大きなエピソードを抜粋し、太宰の意図を考えてみよう。

- ①あさ、眼をさますときの気持は、面白い。かくれんぼのとき、押入れの真つ暗い中に、じつと、しやがんで隠れてみて、突然、でこちやんに、がらつと襖をあげられ、日の光がどつと来て、でこちやんに「見つけた！」と大声で言はれて、…（中略）…箱をあけると、その中に、また小さい箱があつて、…（中略）…何も無い、からつぽ、あの感じ、少し近い。（『全集』p.142）
- ②でも、みんな、なかなか確実なことばかり書いてある。個性の無いこと。深味の無いこと。…（中略）…自分の周囲の生活様式には順応し、これを処理することに巧みであるが、自分、ならびに自分の周囲の生活に、正しい強い愛情を持つてゐない。本当の意味の謙遜がない。独創性にとぼしい。（『全集』p.149～150）
- ③……学校の修身と、世の中の掟と、すごく違つてゐるのが、だんだん大きくなるにつれてわかつて来た。学校の修身を絶対に守つてゐると、その人はばかを見る。変人と言はれる。…（中略）…私の肉親関係のうちにも、ひとり、行ひ正しく、固い信念を持つて、理想を追求してそれこそ本当の意味で生きてゐるひとがあるのだけれど、親類のひとみんな、そのひとを悪く言つてゐる。馬鹿あつかひしてゐる。（『全集』p.151）
- ④午後の図画の時間には、皆、校庭に出て、写生のお稽古。伊藤先生は、どうして私を、いつも無意味に困らせるのだらう。けふも私に、先生ご自身の絵のモデルになるやう言ひつけた。…（中略）… ああ、こんな心の汚い私をモデルにしたりなんかして、先生の画は、きつと落選だ。…（中略）…かうして、おとなしく先生のモデルになつてあげてゐながらも、つくづく、「自然になりたい、素直になりたい。」と祈つてゐるのだ。（『全集』p.154～155）
- ⑤料理は、見かけが第一である。たいてい、それで、ごまかせます。けれども、このロココ料理には、よほど絵心が必要だ。色彩の配合について、人一倍、敏感でなければ、失敗する。せめて私くらゐのデリカシイが無ければね。ロココといふ言葉を、こなひだ辞典でしらべてみたら、華麗のみにて内容空疎の装飾様式、と定義されてゐたので、笑つちやつた。名答である。美しさに、内容なんてあつてたまるものか。純粹の美しさは、いつも無意味で、無道徳だ。きまつてゐる。だから、私は、ロココ料理が好きだ。（『全集』p.163）

- ⑥ 明日もまた、同じ日が来るのだらう。幸福は一生、来ないのだ。それは、わかつてゐる。けれども、きつと来る、あすは来る、と信じて寝るのがいいでせう。… (中略) …おやすみなさい。私は、王子さまのゐないシンデレラ姫。あたし、東京のどこにゐるか、ごぞんじですか？もう、ふたたびお目にかかりません。(『全集』p.174~175)

以上のように、太宰の純粋なオリジナルティーと思われるエピソードを六つくらい出してみた。作品の全般は彼女の日記を盗作したといえるほどそのまま引用していたことは挙げてきたつもりである。有明は戦争批判の作品が書きたい願望で《これをうんと書いて、安つばい雑誌でもいゝ、出る様になればいゝな》と、その気持ちで太宰宛に送ったが、太宰はそれを読んで六つくらいのエピソードを書き加え、「女生徒」という作品を出した訳であった。何を伝えるために彼女の日記を下敷きにして作品化したのだろうか。勿論、有明の日記をそのままに出したら、盗作であつたらう。太宰の書き加えがあつたこそ、「女生徒」という名でみんなに読まれるようになった訳であるが、太宰のオリジナルティーの部分がこの作品でどういう機能を果たしているのかを考えねばならなくなる。

まず、オリジナルティーに現れている〈私〉の気持から探してみよう。《箱を開けても、開けても箱》があり、箱を開けるたびに虚無を感じる。虚しい気持が一杯で、何かすっきりしていない〈私〉の心理描写を箱が数十個も重なっているという表現で喩えている。ところが、…

冒頭では、女生徒が箱を開け続け、中は「からつぼ」であるという比喩を用いている。この比喩は、第一に、女生徒が求めるもの＝父は、不在であることを示している。第二に、読者行為を始める読者に、この作品は、中味が「ある」と期待しても「からつぼ」ですよ、と予告している。女生徒の思考は、「ある」と思えば「からつぼ」というように、とらえどころがないですよ、と予告しているのである。¹²⁾

箱を開けてみたら、中は「からつぼ」であつたことを父の不在、つまり、父を求めていたという指摘は「魚服記」と類似してあり、「女生徒」と重ねていくことは無理があるだろう。むしろ、彼女の気持ちが「からつぼ」であつたことが大事ではないだろうか。〈私〉は間違っている世の中の掟の中で、積極性もない一人に過ぎない「からつぼ」の人であつた。伊藤先生からモデルになってほしいとのこととて薔薇の花の側で姿勢を取り直させられながら、今着ている下着の刺繍も薔薇の花なのに、先生は知らないと責め、「自然になりたい、素直になりたい」と思い込んでいる。また、〈私〉は料理は見た目が一番だと主張し、ロココ料理に喩えている。料理をする時、飾りだけ気を使つたら終わりという感じの料理だつた。〈私〉を本文から引用して《華麗のみにて内容空疎の装飾様式》と定義した

¹²⁾ 吉田咲(2005)「『ある』と思えば『からつぼ』—太宰治『女生徒』—『文芸と批評』(10-2号、早稲田大学文学部)

ら、どうだろうか。〈私〉はロココ料理のような存在であることだ。

つまり、これらを推量し、考えれば、私たちは《内容空疎》の中で生きているかも知れないし、〈私〉はその一人になるかも知れない。外見のみが大事で中は見ていないことの遠まわしで、要するに、当時同じ方面と同じ思考を持ち歩かせられていた画一化を喩えているのではないだろうか。外見が統制された時代に何事でも逆らったり外れたりしたらいけなかった中「自然になりたい、素直になりたい。」と祈るのも無理もないだろう。太宰は有明のように社会意識をしっかり持っている女性の代わりに、魂が揺れ動いている感情豊かな女性設定を書くことで、その時代と向き合える「女生徒」を書き上げることができたのである。

3. 「私」の心理の移ろい

オリジナルティ―〈私〉は《あさ、眼をさますときの気持ちは、何もない、からつぼ》であり、その時が《一ばん虚無》であり、《厭世的》であった。《固い信念を持つて、理想を追求してそれこそ本当の意味で生きてゐる人が》馬鹿者扱いにされ、それが怖くて本当の事が言えない自分に《嘘つきの化けもの》であると責めている。さらに、〈私〉は《正しい希望、正しい野心を持つてゐない》事への嘆き、《華麗のみにて内容空疎の装飾様式》でできているロココ料理を定義化した。少し落ち込んではいいても、意識構造が明確な女性であった。

しかし、有明は社会意識は持っているものの、友達と楽しく勉強したり、買い物したり音楽も聞いたりしていた普通の少女であった。ところが、太宰はそれをわざと退けて、辛かったことやら、暗いことのみ取り上げていた。

- ①……よしよ、なんて、お婆さんの掛声みたいで、いやらしい。どうして、こんな掛声を発したのだらう。私のからだの中に、どこかに、婆さんがひとつ居るやうで、気持がわるい。これからは、気をつけよう。（『全集』 p.142～143）
- ②……私の目は、ただ大きいだけで、なんにもならない。じつと自分の目を見てみると、がっかりする。お母さんでさへ、つまらない目だと言つてゐる。こんな目を光りの無い目と言ふのであらう。（『全集』 p.143）
- ③……私は、カアだけでなく、人にもいけなことをする子なんだ。人を困らせて、刺戟する。ほんたうに厭な子なんだ。（『全集』 p.144）
- ④……蒲団を持ち上げるとき、よしよ、と言つたり、お掃除しながら、唐人お吉を唄ふやうでは、自分も、もうだめかと思ふ。こんなことでは、寝言などで、どんなに下品なこと言ひ出すか、不安でならない。（『全集』 p.144～145）
- ⑤食堂で、ごはんを、ひとりでたべる。ことし、はじめて、キウリをたべる。キウリの青さから、夏が来る。五月のキウリの青味には、胸がカラツポになるやうな、うづくやうな、くす

ぐつたいやうな悲しさが在る。（『全集』 p.146）

⑥放課後は、お寺の娘さんのキン子さんと、こつそり、ハリウッドへ行つて、髪をやつてもらふ。できあがつたのを見ると、頼んだやうにできてゐないので、がっかりだ。どう見たつて、私は、ちつとも可愛くない。あさましい気がした。したたかに、しよげちやつた。（『全集』 p.156）

⑦けさ、電車で隣り合せた厚化粧のをばさんをも思ひ出す。ああ、汚い、汚い。女は、いやだ。自分が女だけに、女の中にある不潔さが、よくわかつて、歯ざしりするほど、厭だ。（『全集』 p.157）

⑧……この間も、誰かに言はれた。「あなたは、だんだん俗つぽくなるのね。」さうかも知れない。私は、たしかに、いけなくなつた。くだらなくなつた。いけない、いけない。弱い、弱い。（『全集』 p.158）

⑨……軍隊生活しなくても、新ちやんみたいに、素直な人だつてあるのに、私は、よくよく、いけない女だ。わるい子だ。（『全集』 p.167）

⑩……肉体が、自分の気持と関係なく、ひとりで成長して行くのが、たまらなく、困惑する。めきめきと、おとなになつてしまふ自分を、どうすることもできなく、悲しい。…（中略）…ひとり力んで、それから、つくづく自分を可哀相に思つた。（『全集』 p.168～169）

⑪……黙つて星を仰いでみると、お父さんのこと、はつきり思ひ出す。あれから、一年、二年経つて、私は、だんだんいけない娘になつてしまつた。ひとりきりの秘密を、たくさんたくさん持つやうになりました。（『全集』 p.169）

⑫……お母さんのことを、心では、心配したり、よい娘にならうと思ふのだけれど、行動や、言葉に出る私は、わがままな子供ばかりだ。それに、このごろの私は、子供みたいに、きれいなところさへ無い。汚れて、恥づかしいことばかりだ。くるしみがあるの、悩んでゐるの、寂しいの、悲しいのつて、それはいつたい、なんのことだ。（『全集』 p.171）

以上のように、太宰治のオリジナルティーだけでなく、有明の日記からも落ち込んでいるエピソードだけ取り上げていることが分かった。それは勿論女学生という大人でもなく、子供でもない中途半端な時期の主人公設定からくる不安であり、感情であるだろう。それへのアピールとも見られる。このような彼女のことを東郷克美¹³⁾は《自己喪失、自己分裂に陥れている》のではないかと指摘し、《世間知らずの純粋な少女がだんだん世間や人間というものを知って行って、しだいにあるあきらめの中で、つまり大人になって行くという形》で《この時期の太宰の世間というものの受容の仕方》¹⁴⁾であると述べられていた。感性豊かな女

13) 東郷克美(2001)『太宰治という物語』(筑摩書房、p.125)

学生の心理の移ろいが書かれている傑作といえる半面、埋めても埋めても埋められない《素直ではない》《下品》なく私》が描かれていることが分かった。特に、彼女が《華麗のみにて内容空疎の装飾様式》に喩えられる意識の構造と存在には太宰が言いたがっている意図が隠されているのではないだろうか。彼女の気持ちであった《不安》という言葉を通じて考えてみよう。

①……ロココといふ言葉を、こなひだ辞典でしらべてみたら、華麗のみにて内容空疎の装飾様式、と定義されてゐたので、笑つちやつた。名答である。美しさに、内容なんてあつてたまるものか。純粹の美しさは、いつも無意味で、無道德だ。きまつてゐる。だから、私は、ロココが好きだ。（『全集』p.163）

②おやすみなさい。私は、王子さまのぬいシンデレラ姫。 （『全集』 p.175）

三人のお客さんに来られた際、夕食の用意をする場面がある。《料理は、すべて、勘で行かなければいけない》と、それで、《私の考案した》所謂、《ロココ料理》をする。台所に残っている食べ物いわゆるまかぬい料理で《一切合切》し、《いろとりどりに、美しく配合させて、手際よく並べて出す》だけで、手間がかからず経済的であると言っている。勿論、味は第二で、とにかく食卓を《たいへん贅沢なご馳走のように》印象づける料理として自慢している。ロココ料理の《ロココ》という単語を調べ意味として《華麗のみにして内容空疎の装飾儀式》であると定義し、《名答である。美しさに、内容なんてあつてたまるものか。純粹の美しさは、いつも無意味で、無道德だ。きまつている。だから、私は、ロココが好きだ》と威張っている。これは《自己を装っている事の意味で、内容がないということ》を軽薄したり、さらにはふざけている¹⁴⁾と言っている。ところが、主人公は、この《ロココ料理》に限らず、《いつもさうだ》と日常のことまでそうしようと心かけていた。この部分は確かに太宰のオリジナルティーであるから、太宰の意図があるはずである。自分の意識と関係無しで無条件で従わせられていた時代の中で、文筆は大変苦勞していた時代であり、軍国主義の下で文筆が行われ、自由に考えたり、自由に作品が書けなかった時期でもあった。こらとへの意味合いの《内容空疎》ではないだろうか。画一化が進んでから最初は目に見える外見から統一・統制しようとしただろう。しかし、その中身までは従わせられなかっただろう。

つまり、《華麗のみにして内容空疎の装飾儀式》という時代像と太宰の意図が重なりあっていた。太宰がこのような大事な意識を男語りではなく、感情豊かな女語りを必要にしていた理由は、弱々しい彼女の口で語らせ、《をんなの言葉》を得、《弱者としての自分の発見》をしながら、《彼らしい文学は発生》¹⁵⁾しようとしたのである。

14) 荻久保泰幸外(1987)「鼎談太宰治をどう読むか」『国文学解釈と鑑賞』(至文堂、p.28)

15) 佐々木啓一(1988)「『女生徒』」「太宰治演劇と空間」(洋々社、p.170)

また、《華麗のみ内容空疎》を別の思考で考えれば、〈シンデレラ〉は王子様と出会い、幸福に暮らしていく内容であるはず。しかし、「女生徒」では王子様の不在という面白い設定をしている。これをまるで《シンデレラ》も《ロココ料理》のように《華麗のみ内容空疎》の一つの例として理解したら、どうだろうか。最後に注目したいところは《王子さまのゐないシンデレラ姫》でありながらも、王子様が来るのを待っていたことである。私はここで、このシンデレラが待っている行動の設定から、昭和一七年の「待つ」という作品と一緒に考えたい。これらは《華麗のみ内容空疎》である〈私〉がこの作品を通じて何が活かされているかが分かるからである。

結論

「待つ」という短編は、二十歳の女主人公が誰かを駅のホームで待ち続けていることから始まっている。もちろん、誰であるかは知らない。通りすぎの人に声を掛けられないかと怖がり、人と挨拶もしていない。さらに、自分みたいな嘘つきは世の中にいないと決め付け、人に声を掛けたくもない気持ちでいっぱいであった。もしかしたら〈私〉が待っていることは人ではないかも知れないと気づく。何故ならば、人間が嫌いであるからである。こういうことは大戦争が始まってから始まった。独り言で自分の事を忘れないでほしいと呟きながら、いつかどこかで〈私〉が見つかるだろうという内容である。

「待つ」の概略から推量すれば、「女生徒」の彼女と類似している部分があり、戦争中という時代設定と弱く嘘つきの存在で積極性もない〈私〉がそれである。「女生徒」でも何かを待ち続けている行為をする女性が描かれ、「待つ」でもある少女が駅で何かを待ち続けている行為があり、本文からその例を挙げることにする。

明日もまた、同じ日が来るのだらう。幸福は一生、来ないのだ。それは、わかっている。けれども、きつと来る、あすは来る、と信じて寝るのがいいのでせ。…（中略）…幸福は一夜おくれて来る。ぼんやり、そんな言葉を思ひ出す。幸福を待つて待つて、たうとう堪へ切れずに家を飛び出してしまつて、そのあくる日に、素晴らしい幸福の知らせが、捨てた家を訪れたが、もうおそかつた。幸福は一夜おくれて来る。幸福は、—…（中略）…おやすみなさい。私は、王子さまのゐないシンデレラ姫。あたし、東京のどこにゐるか、ごぞんじですか？もう、ふたたびお目にかかりません。（『全集』p.174～175）

省線のその小さい駅に、私は毎日、人をお迎へにまゐります。誰とも、わからぬ人を迎

16) 原子朗(1956)「太宰治における〈おんなのこば〉」『国文学解釈と教材の研究』（学灯社）

へに。… (中略) …誰か、ひとり、笑つて私に声を掛ける。おお、こはい。ああ、困る。胸が、どきどきする。考へただけでも、背中に冷水をかけられたやうに、ぞつとして、息がつまる。けれども私は、やつぱり誰かを待つてゐるのです。いつたい私は、毎日ここに座つて、誰を待つてゐるのでせう。どんな人を？ いいえ、私の待つてゐるものは、人間でないかも知れない。… (中略) …もつとなごやかな、ぼつと明るい、素晴らしいもの。なんだか、わからない。たとへば、春のやうなもの。いや、ちがふ。青葉。五月。麦畑を流れる清水。やつぱり、ちがふ。ああ、けれども私は待つてゐるのです。胸を躍らせて待つてゐるのだ。… (中略) …その小さい駅の名は、わざとお教へ申しません。お教へせずとも、あなたは、いつか私を見掛ける。(『全集五』 「待つ」 p.153~155)

「女生徒」では十九歳の女学生が《あすは来る》と信じながら、寝ようとしていた。では、《あす》のことは何を指しているのだろうか。《一夜おくれて来る》かも知れない《幸福》ではないだろうか。《幸福》が《おくれて》来たら大変だと心配しながらも、結局はその《幸福》には全然触れることもなく作品は終わっている。《ふたたびお目にかかりません》と締めくくっているように。これは、《幸福》を思う存分に楽しんだり、堪能できる〈私〉には全然会えないという言い換えにもなりそうである

ここで、《華麗のみ内容空疎》のことをもう一度書き加える。飾りだけが華麗であり、あつけなく中身は空っぽであったの意味。〈私〉は何者であったか。それは勿論シンデレラであった。シンデレラは王子様が谷あり山ありの様々な出来事を乗り越えて姫のところへ白馬に乗ってやってき、王子様と一緒に末永く幸せに暮らしていくという内容が全世界に知られていることであろう。しかし、〈私〉は白馬乗りの王子様がやって来るはずもないシンデレラであった。これは、何か欠かされていまいだろうか。もう最初から〈私〉は《王子様のいないシンデレラ》であると釘が打たれている。首を長くして待ち続けても王子様は来る筈はなかった。なのに、〈私〉は王子様ではない何かを〈待つて〉いたのである。シンデレラにとって幸せは王子様に会えることであるのに、王子様のいない〈私〉の幸せは王子様との再会ではなく、《幸福》という気持ちであった。最後には自分の居場所もわからず、今東京にどこにいるかを教えてほしいという切実な気持ちが込められていたが、その十九歳であった彼女がいつの間にか二十歳になり、「待つ」の主人公になっていた。自分の居場所も分からなかった彼女は東京のある駅のホームに現れたのである。ただ、相変わらず何かを待ち続けていた。《人間をきらひ》と思っていた二十歳の彼女は人に声を掛けられるのではないかと息を呑みながら何かを待ち続けた。一体何を待っていたのだろうか。それは人間ではなく、《なんだか、わからない》が、《ぼつと明るい、素晴らしいもの》を待っていた。これらについては様々な論がある。

これはもはや少女の気持ちではなく、太宰治自身の、当時、すなわち昭和一七年前後

の戦争という状況のなかでいつわらない気持だったのである。… (中略) … 祈りつつ少女が待っている「誰か」とは、太宰治にとって、キリストのほか誰でもなかったのである。イメージのなかで愛しつづけたキリストとの人格的な出会い、澱垢を太宰は一心に一心に待った人だったのである。17)

また、奥野健男¹⁸⁾も《待つということに人生の本質が凝縮されている。この女性は、そして太宰は何を待っているであろう。それは神、救い、と軽々しく口に出しては成らぬ、何かなのだ》と指摘していた。二人ともキリスト、すなわち信仰的なものを待っていたと述べているが、本論では「女生徒」と重ねて考えれば、彼女たちが待っていたことは「キリスト」であり、「神の救い」であるという指摘は受け入れられない。

《内容空疎》から来る不安と寂しさや苦しみを持っていた《積極性もない》シンデレラ姫〈私〉が王子様ではなく《幸福》というのを待っていたのである。たとえその《幸福》が今ではなく《あす》来られても、待ち続けていきたい気持ちであった。もちろん、この《幸福》には《平静な調和の中に一時の安らぎを求める太宰》¹⁹⁾が込められているかも知れない。さらに、「待つ」の少女が《ぼつと明るい》何かを待ち続けていることは「女生徒」《幸福》の延長線であり、その《幸福》を楽しんでいる〈私〉を《いつか見掛ける》と自負してもいいだろう。これは、ようやく手に入れた二回目の家庭生活と新しく創作活動に拍車をかけたがっていた太宰が重なり合っていると言っても過言ではないだろう。

つまり、有明の日記を下敷きにし、「女生徒」が書かれたことは周知のようである。しかし、太宰のオリジナルティーと「待つ」という作品を通じて、太宰の分身とも見られる女主人公の気持ちがよく伝わったと思われる。太宰は《内容空疎》の中で、不安を感じながらも、《幸福》の《あす》はきっと来るという願いが込められ、精神まで従属させられた昭和十年代に無力に、弱く、だらしなくその時代に生き残っている人々の一人に過ぎないと考え、不安を感じただろう。太宰治は埋めても埋めても埋められない無力感の中でその気持ちを材料にし、小説化したのである。わざと社会意識を持っていた女学生の日記は省略し、やむを得ず感受性豊かな女主人公を設定した。彼女は《内容空疎》の世の中を乗り越えたら、堪能できる《幸福》がやってくると信じ、待っていただろう。これを推量すれば、太宰は社会に同情しようとせず、人間の魂が揺れ動いている《ぼつと明るい》ことを望んでいただろう。さらに、その人間の魂とは《自然になりたい、素直になりたい》という気持ちであり、《正しい希望、正しい野心》であったはずである。これらは太宰の文学への希望と姿勢であり、この作品を通じて伝わったのである。

17) 佐古純一郎(1971)『太宰治論』(審美社、p.170)

18) 奥野健男(1962)「解説」『太宰治全集第五巻』(筑摩書房)

19) 榎本隆司(1974)「『女生徒』論」『作品論太宰治』(双文社出版)

【参考文献】²⁰⁾

- 神谷忠孝外（1995）『太宰治全作品研究事典』（勉誠社）
赤司道雄（1985）『太宰治—その心の遍歴と聖書』（八木書店）
安藤宏（2002）『太宰治弱さを演じるということ』（筑摩書房）
小野正文（1992）「太宰とサルトル」『太宰治論集』（第2巻、ゆまに書房）
佐々木啓一（1989）『太宰治演戯と空間』（洋々社）
三枝康高（1966）『太宰治』（有信堂）
相馬正一（2000・2）「太宰治『女生徒』と有明淑子の日記—創作と模倣の間—『国文学解釈と鑑賞』（至文堂）
原子朗（1956・9）「太宰治における〈をんなのことば〉」『国文学解釈と教材の研究』（学灯社）
細谷博（2003）「『女生徒』の成立性—『有明淑の日記』との関係で—『アカデミア』（73号、南山大学）
渡部芳紀（1991・4）「『女性』—女の独白形式—『国文学解釈と教材の研究』（学灯社）

20) 規準はひらがな順である。既存引用文献は載せず、参考となる文献を載せたことを言及しておく。

要 旨

本論は、太宰の純粹な創作によって、書かれたと知られている作品を有明の日記公開を通じ、新しく見直した論説であった。照合したところ、太宰はほぼ有明の日記を材料にし、書き写していたが、6つのエピソードを書き加え、作品を完成していた。特に、《ロココ料理》が自慢の料理であり、《幸福は一生、来ないのだ》と思いつつ、何かを待っていた女学生を書いていた。また、有明の社会意識は避けて、何か不安でたまらない彼女を描いていた。これを戦争と一緒に考えてみた。全てが従属されていた中で、いくら画一化させられても、精神までとはなるとかできないという気持ちで《ロココ料理》を書き加えたのではないだろうか。味はどうであれ、中身はどうであれ、見た目だけ綺麗であれば、それで終りの料理。さらに、シンデレラは王子様に会えるのが普通である。しかし、シンデレラの中身いわゆる王子様はいなく、会うことができずに終わっていた。だから、《幸福は一生、来ないのだ》と思っただろう。ところが、王子様に会えなかった〈私〉は「待つ」の作品でも《ぱつと明るい》何かを待っていた。《明るい》とは何だろうか。勿論、《幸福》であっただろう。幸福に恵まれている〈私〉を《いつか見掛ける》と締めくくっているのは《幸福》が目の前であるという希望のメッセージであろう。《幸福》は単なる《幸福》ではなく、《自然になりたい、素直になりたい》《正しい希望、正しい野心》を望んでいた太宰の文学への姿勢であり、希望であっただろう。

キーワード： 太宰治，女生徒，待つ，有明淑，日記，パロディー

투 고 : 2009. 2. 28
1차 심사 : 2009. 3. 14
2차 심사 : 2009. 3. 28